

青年クリシュナの信仰に就いて

山 邊 習 學

(6. XVII. III. Chāndogya-upanishad) (西紀前、五百年頃)。

梨俱吠陀に表はれたクリシュナ (Krishna) は「黒」い蠻族である。徒衆一萬とゝもに因陀羅 (Indra) の殺され、又その配耦者も残らず殺されたので、その子孫は盡きたとも記載せられた。夫は西紀前三千年に訴る。次に「ウバニシャツド」にはゴーラ、アーンギラサ (Ghora Angirasa) の弟子デーフキー女 (Devaki) の子として表はれてゐる。即ち彼が師から三句を授つた時に、彼は決して (他の智識に向つて) 渴くことはなかつた。三句とは人が臨終の時に唱へるもので、「汝は不滅である」「汝は不變である」「汝は呼吸 (prāṇa) の端である」

次に「マハーバーラタ (mahābhārata) (西紀前三百年より後二百年) には、パインダワス (pāṇḍavas) 兄弟の參謀總長として、又帝師として現はれ、後代の附加と稱せらるゝ薄伽梵歌 (Bhagavat-gītā) に於いて、彼は其説を述べてゐる。

「心の統一なき人には覺性なし、心の統一せざる人には實修なし。實修なき人には寂靜なし。寂靜なき人には、何處よりか安樂來らんや」 (6. saṅkhyā-yoga)

「よしや汝が、一切惡人中の極惡人たりとも、汝は智識の船によりて、一切の罪を脱れうべし」

(36. Jñāna-viṅga-yoga)

かくて一轉して

「我は世界の父なり、母なり、支持なり、……」

…(17. Rāja-vidhī-rāja-guhyā-Yoga)

「心を我に置き、我を信じ、我を拜み、我に歸命せよ。

かやうに、我を最上道として眞我を統一することにより、汝は我に來るべし」(34. R. V. R. G. Y.)

吾々は上述に於いて、時代を重ねるに従つてク

リシユナが、漸次に人格より神格に進み、薄伽梵歌に於いては明かに彼は最上神格を有し信 (Bhakti) の対象となつてゐる。其後數世紀の後恐く十世

紀又は十一世紀頃諸ブラーナ書に於いて、此信が高潮せられ、智と行が隠れて、愛と一つになり、

青春クリシユナが人間愛欲の宗教的對象となり來つたことの偶然でないことが思はれる。そして吾

吾は智を欠いだ信が、如何に手綱なき春駒のやうに、春風落花の間を、果てしも知らず馳りゆく危険を了解せらるゝであらう。

十八ブラーナ中、クリシユナは、第一「ブラフマブラーナ」(Brahma purāṇa) に説かれ、次に「ウキシヌブラーナ」(Vishnu p.)「バガバタブラーナ」(Bhagavata p.) に廣説せらる。殊に後者の第十章のクリシユナの傳記は其特色とする所である。此外「ブラフマ、ワイワルタ、ブラーナ」(Brahma Vaivata p.) にも表はれ、更に「ハリ、ワンサ」(Hari-Vaṇsa) 即ちウキシヌ神の讃歌にして、「マハー、バーラタ」の一部とも云はれ、又は遙かに後期の編纂に係はると云はるゝ書に、彼はウキシヌの化身として第二部に詳しい傳記が載せられてゐる。

近代に於ける西部ヒンドウスターニの大文章家と呼ばれたラルー、ラール (Lālū Lāl) が「バガバ

タ、プラナー」によりて、精細なるクリシュナの傳
を書いた「ブレマ、サーガラ」(「愛の大洋」)(Pri-
ma Sigara) (本書の半は千八百五年に出版せら
れ、更に五年の後に完結を見た。)といふ本がある。
序文に、「インデアン、ニュースペーバー」(千八
百九十三年、十二月二十七日)所載の文を掲げて
ゐる。現在印度人がクリシュナに對する思想の端
を知ることが出来ると思ふ。

「吾人は、クリシュ神をもつて、人類を救済に導
く精神的光明として、全人類の一致する人々の
第一位に置かざるを得ない。凡て彼の行爲には
欲望なく、そして其肉身を禪定に残した。彼は
絶對の化身にして、完全圓滿なる梵として、此
國の大聖者達に認められてゐる。

若し人が、吠壇陀哲學の體現者を見たいと願ふ
ならば、彼は佛陀、^{ジャンカラ}商羯羅、ラーマ、基督、マホ
メット、チャイタマヤによりても満足されぬで

青年クリシュナの信仰に就いて

あらう。獨り聖クリシュナの精神的偉大は彼の
目前に輝くであらう。ちやうど百萬枚の迷妄の
幕も、絶對的空間の立場からは、存在を失ふや
うに」

二

「プラナー」書に於けるクリシュナは、矢張り上
述の「ウパニシャット」に表はされたやうに、デー
ワキーの子として記載せらる。その出生の地はヤ
ムナー河の畔なる主都マトラ(mathuri)時代は婆
羅門教の所謂第三時の終りであつた。

因に、同教の年代を一言すれば、四時期に頒たれ、第一(Krita)
は聖時四千年、その前後に薄暮時各四百年を加ふ。第二(Treta)
聖時三千年、前後の薄暮時は三百年、第三(Dwipana)聖時二
千年、薄暮時各二百年、第四(Kali)聖時一千年、薄暮期各一百
年、そして聖時の一年は人間の三百六十年に相當す。今は第四
期で之を人間の年代に換算すれば四十三萬二千年で、この時期
の初まりて以來、僅かに五千年を経過したのである。

此年代によれば、クリシュナは今より大凡五千

年以前に生れたことなる。父はワスデーヴ(Yasudev)月種族のヤドウ(Yadu)の後裔にして、當時摩都羅の王たるカンス(Kans)の妹なる所謂デーワキーと結婚してクリシュナをあげた。カンス王はその母が夜叉(Rakshasa)に犯されて生れたと稱せられ、殘忍極まる性質をもち、彼が「デーワキーの第八の子によりて殺されるであらう」といふ天の豫言により、彼等夫婦の子を六人まで殺した。

第七の子は那羅延神の乗る阿難陀龍王(Ananta)化身で、懷妊するや韋紐天(Vishnu)の力でワスデーヴの他の妃ロヒニー(Rohini)に移胎せられ、彼女が主都から離れたブラヂと(Braj)いふ土地で牧牛を業とする人々の間に逃れてその子を生んだ。それはバララーマ(Balarama)で、後年クリシュナの良き伴侶となつた。そしてワスデーヴは妻の流産をカンス王に報じた。次にデーワキー妃は第八の子を妊んだ。王は直ちに兵を遣はして夫婦を繋ぎ、

子の生るゝや直ちに殺さうとした。月満ちて生れたのはクリシュナであつた。傳によれば、彼の出生時には釋尊のそのやうな、天地は喜びに震ひ樹々に花咲き、天華雨ふり、乾撻婆神は空にあつて天の樂を奏でた。この時不思議にも、嬰兒は兩親の前に立つた。「空の青色、月の顔、達華の眼、黃絹の衣に、寶冠と璽珞を着け、四手に貝と圓盤と戟と蓮華を持ち、兩親に告ぐるやう。畏れ給ふな私は卿等おんびたちの恐れを除く爲め來たのである。直ぐと私をブラゲの軍を連れていつて、私と同時に生れた耶輸陀女の娘と換へて下さい」云ひ終へて嬰兒は元の姿となつた。この時伽は自と兩親の四肢から落ち、守衛の兵は深い眠りに落ち、事は祕密裡に運ばれ、生れた子は女であると王に報せられた。かくてクリシュナは、平民の子として平和の田園にその青春の時を費した。そして彼の宗教の尤も特色とする所はその田園に置ける生活の記載

である。

三

青春クリシュナの宗教の著しい特性は凡そ左の四項である。

一、平民的

二、自然的宗教

三、婦人を對機とせること

四、信と愛を高潮す

この中、第一と第二第三と第四が特に密接に連關してゐる。平民的であることは、彼が刹帝種から取換るとして牛飼ひの子となつて生れ立つたことが之を證してゐる。彼の傳記者或は寧ろ彼の宗教の創作者は、巧みな脚色から、高い種族から低い種族に彼を引き下した。それは天の日が地の水に移るやうな深い宗教の神祕を暗示するものである。聖なる彼は、牧牛の童子として多くの鼻たれる。

小増達と一所に育ちながら、常に超人の態度を示した。彼の周圍の人達は、同じ血肉を分けもてる一人たる彼を通して常に不可思議なる天の教を聞き、天の澎氣に接するの幸福を享有した。そして牛は印度民族と離るべからざるものにして、特に牝牛は彼等の「母」と呼ばれた程親しいものである彼の青春の時代がその牛飼ひとして生活せられたことも地方的に彼等印度人を惹きつける便宜を有した。そしてその功果の總和は實に平民的である。

更にそれと連關するものは自然的宗教である。此點に關しては諸傳ともに彼が舊宗教たる雷神崇拜を斥けた一段に於いて高潮せられてある。

鬱陶しい陰森な兩期が終りを告げて中部印度に秋が來た。空は禁欲者のやうに燃惱の雲の影も見えず、地は泥から救はれて、湛へた湖は美しい蓮華に彩られた。クリシュナの父母はブラヂの人達

とともに雷神の祭りに忙しかつた。クリシュナは父に尋ねた。「何故雷神を祭るのでありますか」。父は懇ろに教へるやう「雷神は雲と水の王である。彼が雨をふらして地に濕ひを與へて呉れるので草木は芽生く、牝牛は子を生み我等に乳を與る。かくて地は榮え、人は幸福である。即ち雷神は光りによりて地の乳(水)を呑み再び地の凡てを保つ爲めに天の乳をそゝいでくるので。それだから我々は喜んで雷神に犠牲を供へるのだ」

クリシュナは心を決めて父にいふやう

「父よ、私達は地を耕すものでない。又商ひをする者でもない。只牝牛は私達に取つては尊いものである。私達は森を逍遙ふものである。」

父よ、智識に四種あり、思辨(*tark*)、教典(*trayī*、三吠陀)、實修(*Virtu*)、政治(*Virtu*)である。この中いま私は實修に就いて申します。農業、商業、牧業の「何れでも、その従事する對象(職業)が、そ

の人に取つては神聖である」(*Vidyayā yo yatla yukastaspa sa daivatan mahat*)だからその對象が尊崇せられ崇拜せらるべきである。その他の神を敬ふは不法である。耕やされたる地の彼方に森はつき、森の彼方に山は繞る。私達は戸に閉されず壁に縛られず、野も家も持つて居らぬ。荷車で旅しつゝ、到る處樂しくさまよひ歩く山の精は同等の相で森を歩くと云はれてゐる。若しもその精が森に住む人を喜ばさない時は獅子等の野獻となつて其侵入者を殺す。だから私達としては、山を崇拜し、家畜に供へものをせねばならぬ。何のめに雷神などに關りがあろうぞ。家畜と山が私達の神様です。」

父を初め素朴なブラゲの里人達は理に服して彼の教への如くゴバルダン山(*Gobardhan*)を拜し牝牛や牡牛に捧物をした。クリシュナは亦自ら山上に立つて「我は山である」と宣言した。(英譯

「ウキシヌブラーナ」の註に「ハリワンサ」の文を引き、「幻のクリシユナは山となり、捧げられたる肉を食した(māsam Ca mayayā kṛishṇo giribhūtva samāśnute)」(マ々)

「ブレマ、サーガラ」には、クリシユナは「雷神を供養しても何物も来ない。何故かならば、彼は信と救済を興へるものでないから」といひ、供犠の宗教を否定して信と救済の宗教を建つことを暗示してある。

何れにして、此出来事は、傳統的儀式宗教を批評して、現實に立脚したるに理想を建設せんと試みつつある彼の態度が明かに看取せらる。固來の生硬な自然教主たる雷神を排斥し去つて、精練せられたる自然觀、即ち森の過遙者たる彼等の生活の二大資料——直接には家畜、自然の大背景としての山岳——に宗教的意義を發見せんとするは、やがて次に來るべき主觀の信の宗教、愛の宗教の

現實上の足場を示してゐるのである。そして主客融合の天地を開展せんとするのである。

四

釋尊の宗教に於いて、その智慧の宗教の對機が理智の明敏と生活の整済に適せる教團の禁欲者であつたが、信と救済の宗教の對機として、在俗の信者が選ばれ、殊にその最大福音教の際立つた對機として人生の悲慘のドン底に沈める一女性が「觀經」の會座に於ける重要な役目を演じたやうふ、今やクリシユナの宗教に於いての對機は實に婦人連であつた。而も信は常に智慧の光りの届かぬ領野に其地歩を占めることを高潮する爲めに、彼は極端の場合を選んだ。

綠蔭深い蓮池にブラヂの若い女達は水沿した。その扶みにクリシユナを戀ふる心を打け明けた。惡戯いたずらなクリシユナは、いつしか傍の大樹に登り女

達の脱いだ衣服を奪うて技にかけた。やがて女達が氣付いて、驚いてその惡戯を詰ると、彼は靜かにいうた。「ほんとうにお前達が私を戀ふるならば、恥かしさも打ち忘れて、私の許に衣服を受取りに來るがい」女達はこゝに「主」ウキシヌの言葉を想ひ起した。「女はその身體も心も知つてゐるたつた一人を敬ふべき筈だ。」彼等は「何も恥かしいことはない」と一人々々水を出で各自の衣服を受取つた。

今も印度を旅するものは、此光景を描いた繪畫を容易に手に入れることが出来る。良に彼の宗教を赤裸々に表現したものである。人間の規約の凡てを開放して打ち任せる心狀を、尤も露骨に大膽に表はしたものである。

クリシュナは又笛を弄した。その音は人間のあらゆる狡しい理智を拭ひ去り、閉く女達の心を蕩して果てしない靈肉冥合の欲念に彼等を馳つた。

熱い日の威嚴で大天幕のやうな綠蔭には、只柔な溫い顔を造くるに過ぎなかつた時、そこには涼しい風が吹いて、若いブラヂの女達を誘ひ出していつも彼等の崇拜の對象たるクリシュナの噂に餘念なからしめた。かゝる中にも遙かなる繁みを通して戀人の恐ろしい誘惑を籠めた笛の音が聞えた。彼等は堪へ得ぬ春の惱を覺えて歌つた。

おらもなりたやクリシュナの笛に

日にち毎日息吹きこまれ

蜜のやうなる唇交はし

喜し戀しの歌うたふ

果報めでたのクリシュナの笛に。

他の一人は又續いてうたふ。

雨に洗はれ、日に晒されて

そして切られて燻いぶされる

竹たけ(丈)の苦勞を積めりやこそ

主なが情をかけるもの。 ("myths of Hindus")

最後にクリシュナは彼の宗教の本質的特質を更に艶麗に表現した。それは

月下の舞踊

である。月清き秋の夜、彼はブラヂの女達とともに「愛の踊り」(Rāsotsavali)を企てんと試みた。その目的を果すべく彼に取つては一管の笛で充分であつた。彼はヤムナ河畔の深林にあつて笛を弄した。その音は森を通し、林を通し、野を流れて、ブラヂの女達の家に響いた。彼等の心は磁石に吸はるゝ鐵のやうに震ひ動き、瞬時も家にあることを得なかつた。そして狂ふが如く、家の繫縛を逃れて、笛の主に奔つた。或家の妻は夫に止めらるるや、瞑目して、クリシュナを念じ、身を家に殘し、心をもつて凡ての女達に先き立ちてクリシュナの許に到達した。彼は其女の至純の愛慕を知つて、最後の解脱を與へた。

多くの女達は森に集つた。樹の間を洩るゝ月光に照らされて璽珞は美しう輝き、愛と崇拜に燃ゆる女達の顔は、夜目に妖艶を添えた。それは全く森のニンフの集會であつた。クリシュナは語る

「如何に夫が醜くともかたわでも、女といふものは彼に仕ふべき筈だ。それがこの世にも、來世にも仕合せの道である。此の道に背く女は地獄の道をゆくものだ。だから直と各の家に歸り、夫に仕ふがよい。」

女達は意外の教訓に接して驚き悲しんだ。或者は絶望の餘り地に仆れて氣絶した。やが彼等は常の意識の歸りて懇みの數々を述べた

「人も家族も家も夫も棄てられた

世の譏りもなんで顧みやうぞ

私達は倚るべき處はない

ブラヂの王子、どうぞ私達の倚り處となつて下さい。

オ、クリシュナよ。卿はなんといふ惡者なのであらう。初め笛を吹いて私達の心も智慧も、思ひも財物も盗んで仕舞ひながら、今更かやうな冷い言葉をかけるとは、私達を殺すといふもの。

何處を私達の家としませう

私達の心は卿の愛に絡つてゐる。」

かくてクリシュナは女達の心を残しておいて、彼等をヤムナ河畔に導き、愈月下に「愛の踊り」を始めた。

「愛の踊り」は「マハーバーラタ」によれば、男女各手を取りて輪を造り歌ひながら踊り、人数は六十四人を超えてはならぬといふ。(英澤「ウイシヌブラーナ」第四卷、三三四頁、脚注参照)

女達は「愛と情けに酔ひ、全く反省とたしなみを打ち忘れて、クリシュナとともに踊つた」

彼は考へた

全く陶醉した此女達はたい私丈を思つてゐる

私はひとりでにこの女達の夫となつた。

此女達は女のたしなみも打ち忘れて

無智となつて仕舞うた。

そして愛人のやうな愛情で

私に絡り縋る。

智慧も冥想も全く忘れられた。

私は今此女達を捨てやう

彼等の自惚れが高まつて來たから。

クリシュナを失うた女達は、魂を失ふやうに林といふ林を通してあくがれ歩いた。

それは愛に酔うて心傲り、やがてその愛を失ふことを懲し誠しめたものであつた。そして又他の一面からは愛の戯れでもあつた。更又眞の愛の享樂は一度失したものが取り返された時であるといふ

ことをも示した。女達は林を通して求めて歩く間にその敏感なる目は一樣にクリシュナの足跡と、それに絡^{まっ}はる優しい女の足跡而もそれは「情にひたりて、四度路になつてゐた」ものを見て、嫉みの胸を踊せずにおかなかつた。(Kāpi tena Saman yāñ kṛitapunyā madalāsā - padāni tasyāścaitāni śhanūyapa-tanīni ca = 「英譯ウイシヌブラーナ」
第四、三二六頁脚註參照)

「ブレマ、サーガラ」には、殊に此一段を幽艶な筆致をもつて精密な或は寧ろ煩に堪へぬ程に描いてゐる。そして特に選ばれたラーダ女とクリシュナとの戀は、代表的の情熱的宗教信の表現と崇拜せらるゝやうになつた。

失はれた魂は、やがて表はれ出でてクリシュナによりて、女達に回復せられた。「再び踊りが始められやうとしたが、皆なが一人の彼に觸れやうと焦る爲めに、どうしても輪を造ることは出来ない

そこで彼は一人々々の手を執つた。その時彼等の眼はその接觸によりて目をこち、踊りの輪は再び組み立てられた」(「ウイシヌブラーナ」)

註釋に従へば、クリシュナが一人つゝ手を引いてその各の位置に導いたので、皆んなが愛の接觸に酔うて、知覺を失ひ、扶ふ女の手を取りながら夫をクリシュナの手と思ふて満足して踊つたといふのである。

「バガワタ、ブラーナ」には
「愛の踊りの輪は牧女達によりて再び形ちづくられた。瑜伽の主なるクリシュナによりて導かれた。そして女達の各の二人の間に其身を置いた。」

Risotavah sanpravrito gopimaṇḍalamandita: |
yogeshvareṇa kṛiṣṇana tūṣaṇ madhye dvayordva-
yoh -
Pravishṭena grīhītān kaṇṭhe svanikatan striy-

al=

(英譯ウイシヌ、ブラーナ)第四、三二八頁脚註

尙ほ「ハリ、ワンサ」の文あり

靈肉冥合の大幻境は表はされ、彼の愛欲的宗教はその表現の最絶頂を示した。やがて踊りを了へ彼は女達を連れて、ヤムナ河に水浴して勞れを休め語るやう「夜も更けた。もう家に歸るがよい。」女達が訣れを惜むと、

「修道者が私を念するやうに、郷達も又私を念するがよい。何處にあつても、郷達が私を念ふ時に、私は郷達の傍にゐるであらう」(「ブレマサーガラ」八八頁)

と語つた。良に信と救済の奥旨に觸れた言葉である。更に進んで彼の人格的救済は同書に次の如く説かれた。

彼を念ふものは罪みな除くる。

清めに燃ゆる火は彼の身ぞ。

火に落つるものゝ燃ゆるごとく

彼に行くものゝ罪は皆な焼かる。

彼を親と見、子と見、戀人と見、神と見る何れも苟も彼に關する者は、皆な救ひをう(同書七七頁) この種の超人的、神格の記事は數へ擧ぐるも恐く煩に堪へぬであらう、只、彼の讐たるカヌス王が彼に殺さるゝや、その多くの妻妾の嘆きをクリシュナは慰めて、「人生無常」と「生死無窮」をどきて、救済を勧むる處は注意すべきものであらう。

之を要するに彼の宗教は、人間の狡しい理智と常識を破ることに成功したが、信と愛の主張が極端に奔りて、多くの心靈上の危險に陥つた。救済教徒は古より往々にして此危險區域に入つて其本質までも失ふに至つた。元より人智は信の境に到り得ないとしても、眞の信は、恍惚境に入ること

でなくして、正しき智慧を孕んだ信でなければならぬ。智の過重は信の火消え、信の過重は智の明を失うて盲目の戀の使となる、佛魔一紙である。

十六世紀の初めにベンガル洲の人、クリシュナチャイタマヤ (Kṛishṇa chaitanya) が、クリシュナの名を唱へ、恍惚境に入りて、全く彼をその戀人ラーダーとに合一することを實行し、之を宣傳した。信者達と一室に合誦するをサンキールタナ (Sankīrtana) といひ、巷に出でゝ歐ひながら練り歩くをナガルキールタナ (Nagarkīrtana) といふたその誦唱の必要から多くの宗教讃歌が生れ、宗教文藝の勃興を見るに至つた。タゴールなどもその影響を受けたと云はれてゐる。併し此宗教の暗面は今日も尚ほ多くの印度人を茶毒しつゝあることに於いて有名である。(完)

【参考書要目】

“The Prema Sāgara or Ocean of love” translated

青年クリシュナの『仰に就いて』

by Frederic pincott

“Religions of India” by Hopkins

“Mpts of Hindus and Buddhists” by Coowaraswamy.

“Tādyashiottraśut upanishadh”

“Śrīmad bhagavadgītā”

“Vishnu Purāna” translated by H. H. Wilson

“Modern Religions movements in India” by Farguhar.

“Hindu classical dictionary” by Dowson.

“Modern Hism by J. W. Wilkins.

“Hindivism ancient and modern” by Rai Bahadur Lala Baij Nath.